

敬とイモ

塩田弘行

仕事の上で、常日頃、馬鈴薯関係の本を読むことに努めているが、その一つに、題名に惹かれて、更科源蔵著「種薯」を購入した。この本の初版は昭和5年、氏の初めての詩集として200部限定で定価は50銭のものであったが、私が手に入れたのは、初版が出て44年目の昭和48年に復刻版としてのものであり、300部限定中の315号で著者のサイン入りとなっており、1500円で買ったものである。

この本は、期待に反し、馬鈴薯についての技術的なものではなく、88頁に32首の詩が納められている詩集であり、その中に“敬とイモ”の題で18行の詩が馬鈴薯にふれた唯一のものである。

種薯ア重たいなア 肩の骨ぬけさうだなア
落葉松咲いたで急いで播くにやもう遅いわ
然しこの落葉松の花って奴はさびしいなア
敬よ

なんだ 泣くのか
泣くのはよせ敬よ
泣いたって何が来るものか
敬よ 涙流して泣いたりするものじゃない
涙は無言の降服だよ

落葉松の花はさびしくたって黙って咲いて
ゐるぞ
あいつが誰よりもガッチリした松かさをつ
くと思へば愉快じゃないか
やましんでない者はあんな見えないとこ
ろで匂もなく平気で咲くんじゃないか

やる事をやってゐるじゃないか
固い仕事をやってのけてるじゃないか

敬よ
今年も又こやしかけかけ
そこらいちめん薯の花咲かせるべや
土の底にゴロゴロした薯をズッパリならせ
るべや
ドッコイショドッコイショとどこもこゝも
イモだらけにするべや

部数の少ない限定出版の本のため、読者の少ないことを考えると、なつかしい北海道の方言での情緒に溢れたこの詩を、単にこの詩集の中に埋もれることなく、多くの人々に読んでももらいたいと、取上げてみた。

更科源蔵氏は、明治37年に、北海道の弟子屈（テシカガ）で生れ、昭和60年に札幌にて81歳で没した。アイヌ研究、郷土史、小説、随筆などの各分野で活躍、多くの発表をなしている著名人である。

この詩集を出版したのは、釧路の山の中、まだ原始林に囲まれた屈斜路湖畔で、アイヌの子弟だけの小学校の代用教員時代である。

百姓人と言う立場で、克明に情熱をもって書かれていて、ある人は「種薯の如く素朴で、種薯の如く、ごつい詩人」「ほんものの原野人の詩」などと評している。

多くの人々が気づかないで、見落してしまう落葉松の花にふれて、詩の三行目「落葉松の花って奴はさびしいなア」と詠まれ、新葉

と同時に咲く花、“黄色のだ円形の雄花”“薄紅色の卵形の雌花”に淋しさを感じる心、そして、その時が種薯を播く適期という北国の農民の慣習に触れ、詩の二行目「落葉松咲い

たで急いで播くにやもう遅いわ」と詠れていることで、原野の中で育った氏の細やかな観察、実感がよく表現されている。

忘れ得ぬぬくもり

つまごい
元農林水産省婦恋馬鈴しょ
原原種農場長

秋 元 喜 弘

「腰を下して休んでよし、別れ」。農家を囲んでいる木立の根元に向け私は一気に走り、くずれるように腰を下した。うっすらと雲のかかった夜空のところどころから星のかがやきが見える。まだ10月というのに下志津原の夜は冷えこみ、私は両腕でひざを抱きかかえるようにして寒さに耐えていた。

昭和18年（1943）秋、関東地区中等学校連合演習第1日目の夜のことである。両軍が広い千葉県下志津原をそれぞれ南下北上し、2日目の早朝遭遇することとなっていた。私は北軍に属し、ある電車の駅で下車後、夜おそくまでわずかの休憩のほかは、行軍したりかけ足をしたりで疲労はその極に達し、しかも昼間小川や、かなり深い水たまりなどを渡ったためふくらはぎから下はすぶ濡れとなり、湿った衣服や靴をとおして感ずる冷たさはそれこそ絶望的であった。それに、腰を下すと強い空腹感が襲ってきた。しばらく前に乾パンと水筒の水で夕食をとったが、疲れた身体には僅かに塩味のするコチコチのパンなど受けつけるものではなく、定量のほとんど1/4くらいしか食べられなかった。いま空腹でも

残りを食べる元気もないし、また許されもしない。次第に強さを増す冷気のなか、果たしてこれで明朝の遭遇戦まで一睡もせず身体が持ちこたえるであろうか、いささか心もとなくなってきた。

何となくあたりが薄明るくなった感じがしたので、私はそろそろと頭を上げた。

「学生さん、お腹が空いたでしょう。さつまいもですがどうぞおあがりなさい」。農家の土間の戸が開いて、主人と奥さんが大きなざるを持って現われたのである。

「折角のご好意だ、有難く頂戴しよう。よく味わって食べるように」。かたわらから引率の教練教師も声をかけてくれた。

ふかしたばかりなのであろう、湯気の立つあまり太くない3本のさつまいものぬくみは、私のてのひらから全身にめぐっていった。空腹にもかかわらず、しばしそのぬくもりを楽しんでいたが、やがてその1本を口にし無我夢中で食べた。あまりにあっけなく食べてしまったので、2本目はよく味わいつつゆっくりと食べることにした。暗い夜でどのような味もかよくわからないが、皮の色は濃く細目で、中味はボクボクではなく、ややねっとり